自然保護運動考

篭山　京

私は自然保護運動では全くの駆け出しなので、こういう口はばったい発言をするのは気恥かしいことなのだが、熱意だけは誰にもまけないつもりなので、あえてこの一文を書くことにした。

自然保護運動はひと口にいって、自然のまたは自然と人工のおりなした美しいものを、護っていこうという運動なのだから、大抵の人がその趣旨には賛成してくれる。けれども、実際にこれを実行するということは非常にむつかしい。

一例として、大雪山にケーブルをかけるという計画が、私たちの耳にはいったときのことを書いてみよう。自然保護という立場からは、ケーブルがかかれば、大雪山の美の一部が損われると考えざるを得なかった。しかし計画をたてた人たちの主張は、こうであった。

ケーブルカーをかければ、大雪山に登って、その美しいものにふれることのできなかったような人々までが、その美しさにふれることができる。これまでは、一部の登山家だけの占有物であったものを、多くの大衆のものに解放することができる。そのために、工事で多少の破かいがあり、雪渓やお花畑の一部が荒らされるという損失があっても、全体としては日本人の生活にとってプラスだというのであった。そして、いずれのほうが価値が大きいかが議論になったが、結局、大雪山にはケーブルがかけられることになった。

だが、私はそのときも疑問に思ったのは自然保護で守ろうとしている美しいものはこういう秤にかけて良いものなのかということであった。たとえば、ある鳥が、北海道の離島の一部にわずかに現存している。その鳥は地球上では、そこにだけしかいない。学術上にも貴重だし、また実に美しい鳥だとする。その鳥を護るためには、保護飼育の係員もあまり行かないほうが良い。こういう場合には、一切の人間を近よらせないようにするというのが、自然保護の精神なのだと思う。

誰にも見ることはできないが、その鳥が日本人の手で護られている。いいかえれば美しく貴重なものが護られているというそのことが、自然保護の精神なのだと、私は思うのである。

その美しさを、多勢の者で享受したり、後代の子孫にもふれさせたいから護るというのではない。大雪山のお花畑は、容易に見ることのできないところに護られていて良いのである。それを見たいという者は、岩を登り、草を分けて、額に汗しなければならないのだし、それだけに貴重なものなのである。

だから、自然保護運動というのは、精神的な国民運動でなければならないのだと思う。美しいものを、永久に護るというジュン愛運動にほかならないのである。

したがって、今日のような社会風潮の中では、壁だらけである。今日の社会では、美しい物は享受しよう。金の力で享受できるようにしようとしている。エジプトの秘宝を東京まで運んできて、みんなで享受しようというのである。だから、大雪山にケーブルカーをかけて、労をすくなくして、お花畑を享受しようということにもなるのである。

そういう風潮に抗して、美しい物を、必要ならば人の眼からも護ろうという運動をやりとげていこうというのだから、実にむつかしいのである。

しかしいったい、そんな運動をやって、どういう利得があるのかとかさねて問う人があるかもしれない。経済上の利得はひとつもないのかもしれない。けれども、金によっても権力によっても、どうすることもできないところに、美しい花や鳥が護られている。それも、日本の国民の真心によって護られている。ということが、なにものにもかえ難いことなのではないだろうか。

だから私たちは、なにものにも優先して護るべき物を見つけて、自然保護運動を実践すれば良いのであって、それをほかのものと秤にかけてくらべてみる必要はないのである。しかし、もちろん、その護るべき美しいものの価値が、誰の眼にも正しく支持されなければ、保護運動は成功しない。一部の者が勝手に、貴重だといってみても仕方がない。したがって、真に保護すべきものの発見が、自然保護の第一歩だということになるのである。

自然保護運動というのは、こういうものなのだと、私は考えているのだが、間違っているだろうか。

（北大・教育学部長）